

横浜市立 南台 小学校 学校評価報告書 (平成28～30年度)

重点取組分野	平成28年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	○朝モジュールの学習等を使い、基礎的基本的な知識や技能の定着を図る。 ○個に応じたためあての設定や課題解決のための方法など授業の工夫やより良い改善に努める。 ○教え合い、学び合う学習を充実させ、自他のよさも理解し合いながら、自信を持って学習する子どもの育成に努める。	学力状況調査の結果から見ると、基礎基本の定着は見られる。思考力・判断力・表現力に関しては、さらに指導の充実を図る必要がある。子ども一人ひとりの自己肯定感を高め、取り組みをこれからは、重点研究などを通して実践していかなければならない。	B
豊かな心	○学習や生活指導において、内発的動機付けによる人権を尊重する情操豊かな心の育成に努める。 ○様々な人との交流の場の充実を図り、コミュニケーション能力や社会性など、人間関係づくりに欠かせない心や力の育成に努める。	学校行事や児童会活動など、子ども主体に展開できるように取り組んできているが、まだまだ受け身で取り組んでいる子どもも多いため、主体的に活動できるような支援が必要である。道徳の授業を充実させるようにしてきているが、さらに、子どもたちに実践的な力が身につくようにしていく必要がある。	B
健やかな体	○体育科・家庭科・特別活動・行事・生活指導等の場で、自分自身の健康に関心をもち、健康の大切さを理解し、健康を守り、育てる生活を実践できる態度を養う。 ○体育学習の充実だけでなく、休み時間を利用したマラソントイムやなわとびタイムなどの活動を通して、体を動かすことの喜びや楽しさを知り、生活の中に運動を取り入れようとする態度を養う。	重点研究「体育科」では、楽しい体育を目指し、取り組んできた。子どもが主体的に運動する姿が多く見られるようになり、良い成果が感じられる。学校保健委員会、姿勢と健康にも着目し、取り組んだ結果、そのよさを知ることができた。全校で取り組むなわとびやマラソントイムなど、年間を通して取り組まれている。	A
特別支援教育	○児童支援専任教諭、特別支援コーディネーター、関係職員による「特別支援教育委員会」を組織し、保護者や関係機関等との連携を図りながら、一人ひとりの教育的ニーズに対応できる指導体制づくりと実践を目指す。	個別支援級の子どもたちが、一般級に交流する時の体制が、どのクラスもごく自然で楽しい交流になっていて良い成果につながっている。特別な配慮が必要な子どもにも対して、教職員の共通理解のもとに取り組むことができていく。保護者や地域への発信は、本校の取り組みを伝えていく必要がある。	B
児童生徒指導	○「当たり前3カ条」を明記し、挨拶・時間を守る・言葉遣いの3点を職員・家庭で共通理解し児童生徒指導を推進する。 ○道徳教育を励行し、規範意識や公共心等を育てる取り組みを充実させる。	常に教職員全体で、情報を共有しながら取り組んできている。また、保護者や関係機関との連携も図りながら取り組むこともできている。教職員の課題意識も高く、学年や学校全体のチームとして、みんなで取り組もうとする姿勢がある。	A
地域連携	○家庭・地域との連携強化のため、地域行事・地域活動に積極的に参画できるような、教育活動の充実を図る。 ○保護者が授業や学校行事に参観したり、参加したりする機会を多くもち、相互の理解ができるように努める。	年間を通して、地域の行事が多く、子どもたちにとってはとても良い環境である。教職員も地域の方々とのかわわりを大切に参観した体制ができていて、子どもたちにも良い影響を与えていると感じる。地域の教育力を生かした教育活動も実践している。協力体制も整っている。	A
安全管理	○危機管理(防犯・防災)マニュアルを常に見直ししながら、事件・事故や災害発生時に適切で迅速な対応ができるように、職員研修や避難訓練等を充実させ、周知・徹底を図る。 ○学校施設・校舎内外の安全、維持管理のための点検の実施や必要な改善を図る。 ○個人情報保護等を守りながら日々の指導を行う。	防犯・防災に関しては、様々な場面を想定した訓練を計画的に実施し、意識を高めている。施設的な面では、門の施錠など防犯として足りないところもあり課題として残っている。個人情報に関することや「あゆみ」の誤記載などに関しては、校内研修などを通して意識を高めてきた。	B
人材育成・組織運営	○校内重点研究をはじめ、質の高い学習指導ができるように、研究・研修に努める。 ○人権教育や児童理解の研修を充実させ、教育者としての力量や人間性を高める。 ○経験年数や本校での在職期間、資質等を考慮し、組織編製の工夫と計画的な人材配置を行う。	教職員の年齢構成はともバランスが良く、教職の経験が浅い人の指導が学年等でもできている。メンターチームの取り組みや、校内研修会など活発になりつつあるが、さらに主体的な取り組みを期待したい。	B
いじめへの対応		①人権教育の視点から授業改善を図る。②様々な人との関わりや豊かな体験を通していじめ防止に向けた学校風土づくりに努める。③定期的にアンケートを実施すると共に教職員間の情報共有や研修を通して、教職員の資質向上に努める。	B
ブロック内相互評価後の気付き	中学校の先生が、6年生の教室で直接授業を行う取り組みをしたところ、子どもたちの反応はとても良いものがあつた。また、4校でそれぞれ授業を公開したり、教科ごとに集まって話し合いをしたりできたことは、ブロック内の連携を高めるためにも良い取り組みであった。地域とともに活動することも多く、地域の中の中学生や小学生として活動している児童生徒を、互いの教師と一緒に見守り、支援することができる環境にあることも素晴らしいと感じている。	・6年生を対象に、中学校の先生に来校していただき体験授業を実施した。6年生の子どもたちにとっては中学校の先生や授業について感じることができ、進学への不安を和らげたり期待をもったりすることができた。また、中学校の先生は、子どもたちの実態をとらえるよい機会になった。 ・新学習指導要領の施行に向け、ブロック内の児童、生徒の実態について話し合うとともに、今後、育てていきたい子ども像を共有することができた。	
学校関係者評価	本校が取り組んでいる「当たり前3カ条」に関して、良い取り組みであり、これからも継続してほしいとの意見が多くあつた。「まちの美術展」のような、地域も含め、幼保小中が一同に参加し取り組める活動は継続してほしいとの意見が多くあり、高い評価であった。「挨拶」に関しては、少しずつ良くなっているが、学校内だけでなく、登下校を見守ってくださっている方に対しても、きちんとできるように指導してほしいとの意見もあつた。今後の指導に生かしていきたい。	・朝の見守りをしている、とあいさつをする子が増えていると感じる。目を合わせるとあいさつを返してくれるのはうれしい。 ・高齢化などにより、学校に協力できるシルバー層が減少し、見守りが継続できるかが課題となっている。また、地域の中で交わる機会が少なくなっている。いろいろな年代層をいかにつなぐかが課題。 ・子どもは落ち着いているが不登校傾向にある子も増えている。今の自分を認められる自己肯定感もてる子どもの育成を、幼、保、小、中、地域がともに進められるとよい。	

重点取組分野	平成29年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①朝モジュールの学習等を使い、基礎的基本的な知識や技能の定着を図る。②個に応じたためあての設定や課題解決のための方法など授業の工夫やより良い改善に努める。③教え合い、学び合う学習を充実させ、自他のよさも理解し合いながら、自信をもって学習する子どもの育成に努める。	基礎的・基本的な知識・技能の定着に成果が見られる。朝モジュール等の活動については、さらに子どもたちの実態に応じた内容を工夫したい。重点研究等を通して、教え合い、学び合いを大切に授業の実践が充実してきている。継続し、自信をもって主体的に学ぶ子どもの育成を進めたい。	B
豊かな心	①学習や生活指導において、内発的動機付けによる人権を尊重する情操豊かな心の育成に努める。②様々な人との交流の場の充実を図り、コミュニケーション能力や社会性など、人間関係づくりに欠かせない心や力の育成に努める。	ペア学年の活動、他学年との交流の場の充実により、子ども同士のよい関係が築けている。また、地域の様々な方との交流、幼稚園、保育園、中学校との交流も心の育成につながっている。今後は、さらに子どもたちの主体的な取組を大切に、活動の充実を図ってきたい。	A
健やかな体	①体育科・家庭科・特別活動・行事・生活指導等の場で、自分自身の健康に関心をもち、健康の大切さを理解し、健康を守り、育てる生活を実践できる態度を養う。②体育学習の充実だけでなく、休み時間を利用したマラソントイムやなわとびタイムなどの活動を通して、体を動かすことの喜びや楽しさを知り、生活の中に運動を取り入れようとする態度を養う。	重点研究を柱にした体育授業の充実とともに、年間を通して、学校保健委員会での「睡眠と健康」をテーマにした取組や、マラソントイム、縄跳びタイムなど、体を動かす実践により、健康への意識を高めたり体力の向上を図ったりすることができている。	A
特別支援教育	①児童支援専任教諭、特別支援コーディネーター、関係職員による「特別支援教育委員会」を組織し、保護者や関係機関等との連携を図りながら、一人ひとりの教育的ニーズに対応できる指導体制づくりと実践を目指す。	特別支援教室の設置や特別支援教育支援員事業の活用により、可能な限り個々のニーズに応じた指導を実践してきた。指導体制の周知や理解を図っていく必要がある一方、そういった指導へのニーズも高まっており、体制の一層の充実を進める必要がある。	B
児童生徒指導	①「当たり前3カ条」を明記し、挨拶・時間を守る・言葉遣いの3点を職員・家庭で共通理解し児童生徒指導を推進する。②道徳教育を励行し、規範意識や公共心等を育てる取り組みを充実させる。	引き続き、職員間の情報共有や保護者、関係機関との連携を推進してきた。また、「特別の教科 道徳」の実践に合わせ、振り返り記録を残すなど、全職員が年間を通して、子どもの育ちを見とっていくような指導体制が整いつつある。	A
地域連携	①家庭・地域との連携強化のため、地域行事・地域活動に積極的に参画できるような、教育活動の充実を図る。②保護者が授業や学校行事に参観したり、参加したりする機会を多くもち、相互の理解ができるように努める。	多彩な地域行事をはじめ、地域の教育力を生かした活動も実践されており、それらに参観して参加する児童も多い。また、教職員も地域との関わりを大切に意識をもち、取り組んでいる。さらに地域を見直し、より充実した教育活動や子どもの育ちにつなげられるようにしていきたい。	A
安全管理	①危機管理(防犯・防災)マニュアルを常に見直しながら、事件・事故や災害発生時に適切で迅速な対応ができるように、職員研修や避難訓練等を充実させ、周知・徹底を図る。②学校施設・校舎内外の安全、維持管理のための点検の実施や必要な改善を図る。③個人情報保護等を守りながら日々の指導を行う。	防犯・防災に対する取組では、より具体的な場面を想定した訓練を実施してきた。また、今年度の実践を通して得られた改善点をもとに、危機管理マニュアルを見直し、次年度から実践できるよう具現化することができた。また、門の施錠を確実にできるように、正門への通用門の設置を行った。	B
人材育成・組織運営	①校内重点研究をはじめ、質の高い学習指導ができるように、研究・研修に努める。②人権教育や児童理解の研修を充実させ、教育者としての力量や人間性を高める。③経験年数や本校での在職期間、資質等を考慮し、組織編製の工夫と計画的な人材配置を行う。	校内重点研究の充実により、特に体育授業において、より実践力の向上が図られた。また、メンターチームが年間を通じて、定期的・継続的に活動し、経験の浅い職員にとってよい研修の場となった。	B
いじめへの対応	①人権教育の視点から授業改善を図る。②様々な人との関わりや豊かな体験を通していじめ防止に向けた学校風土づくりに努める。③定期的にアンケートを実施すると共に教職員間の情報共有や研修を通して、教職員の資質向上に努める。	定期的なアンケートや教職員間の情報共有により、いじめの未然防止と早期発見、早期対応を心がけることができた。引き続き、いじめを起こさない学校の風土づくりに努めていきたい。	B
ブロック内相互評価後の気付き		・素直でやるべきことをきちんとやる児童生徒が多い一方、自ら考え、進んで行動したり、失敗を恐れずチャレンジしたりする力が弱いといったブロック共通のよさや課題が明らかになった。それらの実態をふまえた各校の取組を共有すると共に、今後、さらにそれぞれの取組のつながりについて意識しながら教育活動を工夫改善できるようにしていく必要があることを確認した。 ・昨年度より話し合われてきた、育てたい子ども像をもとに、ブロック目標が決まり、さらにそこに向けて育てていきたい資質能力を分析し、まとめることができたのは大きな成果であると感じる。	
学校関係者評価		・学校は充実した教育活動を行っている。大変多くのことに取り組んでいて、これ以上何をやるのかと感じる。あれもこれも増やしていくのではなく、大切なことを焦点化していくことも必要ではないか。 ・地域としては、地域の役割を明確にし、地域と学校で担うことを分けていく根付かせたい。学校以外の人のとかかわりも大切で、町内行事も子どもも中心に変えていきたい。 ・教員の仕事が多いように感じる。子どもと接する時間をもっとほしい。地域に任せられることは任せよう。	

重点取組分野	平成30年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①児童の実態に即した朝モジュール学習等の充実により、基礎的基本的な知識や技能の定着を図る。②個に応じたためあての設定や課題解決的な学習の推進、体験活動の重視を図った授業の改善に努める。③教え合い、学び合う学習を充実させ、自他のよさも理解し合いながら、主体的に学習する子どもの育成に努める。	子どもたちが自分の考えを表現したり、学び合ったりする学習を意識した授業改善が進み、そのような子どもの姿が多く見られるようになってきた。学習の基礎基本の定着については、一定の成果は上がっているものの、引き続き、個に応じた指導の充実を図っていく必要がある。	B
豊かな心	①道徳的価値について、自分事として考えたり話し合ったりすることで理解を深めるような道徳科の授業の充実を図る。②様々な人との交流の場の充実を図り、コミュニケーション能力や社会性など、人間関係づくりに欠かせない心や力の育成に努める。	ペア学年の活動や地域の様々な方々との交流、幼稚園、保育園との交流等の充実により、進んでコミュニケーションを図る子どもや人とかかわることを楽しんでいる子どもが増えている。さらに、相手の気持ちを考えて発言したり行動したりすることができる思いやりの心を育てていきたい。	A
健やかな体	①体育科・家庭科・特別活動・行事・生活指導等の場で、自分自身の健康に関心をもち、健康の大切さを理解し、健康を守り、育てる生活を実践できる態度を養う。②体育学習の充実だけでなく、休み時間を利用したマラソントイムやなわとびタイムなどの活動を通して、体を動かすことの喜びや楽しさを知り、生活の中に運動を取り入れようとする態度を養う。	体育学習の充実を図るとともに、休み時間や集会、朝の特別クラブ等、年間を通して様々な活動の場を設定してきた。子どもたちはそれらの活動に積極的に取り組み、楽しみながら活動することで、体力向上を図ると共に、健康への関心を高めたり、理解を深めたりすることができた。	A
特別支援教育	①教職員の連携を深め、特別支援教室の充実を図る。②職員研修を通して、特別支援教育に関する教職員の理解を深めると共に、指導力の向上を図る。③特別支援教育に関する取組について、積極的に保護者、地域に発信し、理解を得られるようにする。	支援が必要としている子どもたちにできる限り多くの支援ができるよう、特別支援コーディネーターによるきめ細かな調整を行い、それぞれの学習意欲の向上と学力の向上を図ることができた。保護者の理解が広がると同時にニーズも一層高まっており、体制の充実が課題となっている。	B
児童生徒指導	①「当たり前3カ条」を明記し、挨拶・時間を守る・言葉遣いの3点を職員・家庭で共通理解し児童生徒指導を推進する。②定期的に職員間の情報共有の場を設定し、児童の状況についての共通理解を図る。③児童生徒指導に関する記録を残すことで、課題の共有と継続的な指導に生かす。	全職員で児童指導の基本方針を共有することで、児童への定着が図られつつあり、挨拶や時間を守った生活習慣が身に付いてきている。また、定期的に時間を設けて、児童に関する情報を全職員が共有することで、組織的に対応する体制が構築できた。	A
地域連携	①家庭・地域との連携強化のため、地域行事・地域活動に積極的に参画できるような、教育活動の充実を図る。②保護者が授業や学校行事に参観したり、参加したりする機会を多くもち、相互の理解ができるように努める。	重点研究を柱に、様々な形で地域の方々との連携した学習が展開された。子どもたちは学習を通して、地域のよさを感じると共に、地域の一員としての意識をもてるようになってきている。今後も子どもとの思いと共に、保護者や地域の思いも大切にしながら、よりよい連携を図ってきたい。	A
安全管理	①危機管理(防犯・防災)マニュアルを常に見直しながら、事件・事故や災害発生時に適切で迅速な対応ができるように、職員研修や避難訓練等を充実させ、周知・徹底を図る。②学校施設・校舎内外の安全、維持管理のための定期的な点検と改善を図る。③個人情報保護の重要性を十分認識し日々の指導を行う。	危機管理マニュアルの見直しを図り、災害発生時により安全、確実にスムーズな対応法を確立した。保護者に向けていかに説明すると共に、具体的な訓練を実施することで周知し、理解を得ることができた。	A
人材育成・組織運営	①校内重点研究をはじめ、質の高い学習指導ができるように、研究・研修に努める。②人権教育や児童理解の研修を充実させ、教育者としての力量や人間性を高める。③経験年数や本校での在職期間、資質等を考慮し、組織編製の工夫と計画的な人材配置を行う。	重点研究の部会の持ち方を工夫したり、指導案検討の回数を増やしたりすることで、じっくりと授業づくりの意図や具体的な手立てを話し合うことで、理解を深め、授業力の向上につなげた。	B
いじめへの対応	①人権教育の視点から授業改善を図る。②様々な人との関わりや豊かな体験を通していじめ防止に向けた学校風土づくりに努める。③定期的にアンケートの実施により、いじめの未然防止と早期発見、早期対応を心がける。	気になる児童についての情報を全職員で共有したり、いじめに発展しそうな事案について、児童支援専任を中心に組織的に対応したりすることで、いじめ防止と早期発見、早期対応ができた。	B
ブロック内相互評価後の気付き		・素直でやるべきことをきちんとやる児童生徒が多い一方、自ら考え、進んで行動したり、失敗を恐れずチャレンジしたりする力が弱いといったブロック共通のよさや課題が明らかになった。それらの実態をふまえた各校の取組を共有すると共に、今後、さらにそれぞれの取組のつながりについて意識しながら教育活動を工夫改善できるようにしていく必要があることを確認した。 ・昨年度より話し合われてきた、育てたい子ども像をもとに、ブロック目標が決まり、さらにそこに向けて育てていきたい資質能力を分析し、まとめることができたのは大きな成果であると感じる。	
学校関係者評価		・学校は充実した教育活動を行っている。大変多くのことに取り組んでいて、これ以上何をやるのかとを感じる。あれもこれも増やしていくのではなく、大切なことを焦点化していくことも必要ではないか。 ・地域としては、地域の役割を明確にし、地域と学校で担うことを分けていく根付かせたい。学校以外の人のとかかわりも大切で、町内行事も子どもも中心に変えていきたい。 ・教員の仕事が多いように感じる。子どもと接する時間をもっとほしい。地域に任せられることは任せよう。	

**学校経営中期取組目標振り返り**  
重点的に取り組んできたことに関しては、良い成果が出たと感じる。学力の向上はこれからも目指さなければならないが、学習意識や生活意識など、自己肯定感と関係するような部分では、さらに意識的な取り組みが必要である。授業改善することや、それに伴う授業力の向上を目指したい。新しい指導要領をも見据えた取り組みを実践していく必要がある。基礎力・表現力・実践力を高めたいための取り組みを展開することを大切にしたい。

**学校経営中期取組目標振り返り**  
・今年度も地域とのつながりを大切にしながら、日々の授業、学校行事、地域行事等に取り組むことができた。一方、これまで地域の中で学校との連携を担ってきた方々の高齢化など、状況も変化してきた。新たな連携の持ち方を模索していく必要がある。基礎・基本の定着については一定の成果を見ることができたが、主体的に取り組むといった面では課題が残っている。今後、重点研との連携を図るとともに、様々な人とのつながりを大切にしながら、「生きる力」を育む教育活動を目指していきたい。

**学校経営中期取組目標振り返り**  
・重点研究との運動を図り、地域や様々な人とのつながりながら意欲的に学ぶ子どもを育てる方向性を見出すことができた。また、ブロックで目指す子ども像、本校の学校教育目標の策定を進めることができた。新たな学校づくりに向けて動き出し、模索が続く中、働き方改革の推進、経験の少ない教員の比率の高まりなど、職場環境も大きく変化している。これまでの3年間の成果を礎に次の3年間を積み上げて行かれるよう、人材育成、教職員間の連携を密にし、チームとしての学校づくりを推進していきたい。